

“To Write for My Own Race”: イエイツとウォルコットに見るポストコロニアルの幻影

諏 訪 友 亮

1. 序

アイルランドの作家 W. B. Yeats (1865-1939) の詩 “The Fisherman” は、1900～1910 年代にイエイツとダブリンの主要な文化受容層との間に生じた長年の軋轢のもと作られた。軋轢とは、例えば、アビー劇場で上演された劇に対する数々の抗議行動であり、なかでも同僚 John Millington Synge (1871-1909) の *The Playboy of the Western World* (1907) に対する暴動はその最たる例と言えるだろう。また、この詩が書き始められる前には、Augusta Gregory (1852-1932) の実弟であり画商である Hugh Lane が集めた絵画の収蔵をめぐるイエイツを巻き込んだ論争が起こり、これは同時期の労働者と資本家の衝突であるダブリン・ロックアウトとも連動し、大きな社会問題になった (McDiarmid 11, 29-31)。結局、絵画の受け入れ計画は頓挫し、受け入れを強く支持していたイエイツは失意を重ねることになった。

“The Fisherman” は、これまで多くの視点から読み解かれており、「釣り人」はイエイツにとっての理想的な読者、イエイツ自身あるいはシングや他のアングロ・アイリッシュの投影、アイルランド西部の小作農の理想化などと読まれてきた。しかし、それらの読みは互いに対立するというより、どれも一定の筋が通っており、「釣り人」はいくつもの要素を混合した曖昧な存在として表れている。本論では、想像によって生みだされた、この世に「存在しない」釣り人を、イエイツに取り憑いた幻影／亡霊 (phatasm) の一種と見ることで、ポストコロニアル文学のある段階につきまとう、理想化された聴衆について検討する。

英語圏カリブ海セントルシア出身の Derek Walcott (1930-2017) は、1950 年代後半の未発表のエッセイに “The Fisherman” の一節 “for [my] own race” と書き記し、カリブ海の庶民が使う言葉を通して彼らを描くことで、新しいカリブ海の統合されたイメージとアイデンティティを創出できないかと模索していた。ウォルコットは、イエイツと同じくポストコロニアル社会で比較的めぐまれた中産階級を出自としており、農村部の人々からの距離がある一方で彼らを理想的な存在と見る

など、イェイツとの共通点も多い。本論では、“The Fisherman”の一節を通してイェイツと結びつくウォルコットにとって、西インド連邦の成立と瓦解や島々の独立といった大きな世界史のうねりのなかで、彼が見た理想の幻はどう変遷していったのかを辿りたい。

2. イェイツの “The Fisherman” —— 幻影／亡霊、読者

“The Fisherman” は 1914 年に書き始められ同年 6 月に完成 (Foster 2: 11)、1916 年 2 月にアメリカのモダニズム詩誌 *Poetry* に他の詩とともに掲載された。全体的に緩やかに abab と押韻が踏まれる 4 行単位のつらなり (連分けされていない quatrain) が緩い弱強三歩格 (iambic trimeter) で組まれている。恥知らずを意味する “knave” という古めかしい語が使われる一方で、ほとんどは後期イェイツの詩を特徴づける簡潔な言葉遣いである。この詩は、先述の通り、「釣り人」が誰なのかをめぐってさまざまな意味が読み込まれてきた。

The freckled man who goes
To a gray place on a hill
In gray Connemara clothes
At dawn to cast his flies—
It's long since I began
To call up to the eyes
This wise and simple man.
All day I'd looked in the face
What I had hoped it would be
To write for my own race
And the reality (Yeats, “The Fisherman” 219–20)

釣り人は、主にイェイツ自身、シングや他のアングロ・アイリッシュ、アイルランド西部の小作農 (peasants)、理想的聴衆などと解釈されてきた。釣り人がイェイツ、あるいは彼の “anti-self” を含むものと論じたのは、例えば Unterecker であり、イェイツの別の詩 “Ego Dominus Tuus” において、語り手の一人が出会う「分身」 (“the mysterious one who yet / Shall walk the wet sands by the edge of the stream / And look most like me, being indeed my double, / And prove . . . / The most unlike, being my anti-self” [Yeats, *The Variorum* 371]) が釣り人と似ているとしつつ、釣り人はイェイツの自我と反自我を合成した存在と示唆している (Unterecker 147)。確かに釣り人の “wise and simple” という形容はイェイツと正反対と言うにふさわしい一方で、イェイツは釣りを嗜んでおり (Foster 1: 248, 319)、フライ・フィッシングをする様はイェイツ自身の反映とも言えるだろう。Fleming が、網ではなく釣り竿を使って釣りをしている点で、専業の漁師ではなくアングロ・アイリッシュのジェントリなのではないかと指摘していることも、この読みの可能性を高める (Fleming 8)。

しかし他方で、釣り人は、1909 年に急逝したシングとする見方も十分に成り立つ。Foster は釣り人のモデルとしてシングを挙げ、詩の一節 “The dead man that I loved” とは彼であり、この時期の

イエイツのエッセイに頻出する “popularity versus solitude, a natural sense of aristocracy, and the essential artistic integrity that resides in an Irishness above hackneyed commonplaces” がシングをよく捉えているとする (Foster 2: 11-12)。Foster が言うように、イエイツのエッセイ “J. M. Synge and His Time of Ireland” (1911) には、シングが自らの民族 (“race”) のために孤独に書き続けていた姿が描写される—— “Synge . . . sought for the race . . . [T]hose great poets who have dreamed it in solitude, and who to this day in Europe are creating indestructible spiritual races” (Yeats, *Early Essays* 246-47)。物静かで孤独な性格、アイルランド西部を駆け回ったシングは、まさに釣り人のイメージと合致するのである。

また、Heaney は、釣り人の原型に失墜した政治家 Charles Stewart Parnell を読み取り (Heaney 108)、Torchiana は、オーガスタ・グレゴリーや息子ロバート、そしてヒュー・レインもつらなる、コネマラ地方に領地を有したグレゴリー家の人間と結びつけている (Torchiana 292-95)。このように、イエイツやシングを始めとする、カトリックの大衆とは切り離された孤高のアングロ・アイリッシュを釣り人と重ねあわせる読み方が、1つの大きな傾向を成しているのである。

それとは全く異なり、釣り人を理想化された小作農とする見方も根強く存在する。Fleming は、彼が小作農にもアングロ・アイリッシュにも見えることを認めながらも、文芸復興の原動力の1つともなったアイルランド西部の小作農やケルトの表象に “The Fisherman” を位置づける (Fleming 7, 21-43)。Hirsch も同様に、釣り人は想像上の小作農であるとし、じゃがいも飢饉後の実際の小作農と文芸復興における文学的なその乖離を強調する (Hirsch 1116-18)。イエイツは初期に、素朴な老いた漁師とその妻の詩 “The Meditation of the Old Fisherman” を発表していることもあり、コネマラ地方の服を着込んだ釣り人は、こうした農民の表現史の一部と見ることは可能である。

釣り人がアングロ・アイリッシュ、カトリックの小作農のいずれにせよ、この人物をイエイツの理想的聴衆と見る読解もある。Albright はこの詩に登場する釣り人がイエイツにとっての “an ideal audience” であると明言している (Albright 572)。Yeats は “The Fisherman” の引用部の続きで、大衆におもねる厚顔無恥な人々への嫌悪を隠さず、彼らによって見識ある人間と偉大なアートが叩かれる (“The beating down of the wise / And great Art beaten down”) 状況に失望し、彼らのような聴衆を軽蔑する思いのなかから (“In scorn of this audience”)、一人の釣り人を作り出したと書いている (Yeats, “The Fisherman” 220)。釣り人は、敵対する人々の代わりとなる聞き手として想像されたことに疑いの余地はない。

以上で、釣り人がイエイツ、シング、他のアングロ・アイリッシュ、アイルランド西部の小作農、理想的聴衆と読まれてきた経緯を確認してきたが、これらの読み方はそれぞれが打ち消しあうところか、程度の差こそあれ、並立していると言うことができる。それほどまでに、釣り人はいくつもの要素が混合され、曖昧に作られているのである。イエイツは1934年のBBCによるラジオ放送で執筆当時を振り返り、こう述べている。

[W]hen I was very bitter I used to say to myself, “I do not write for these people who attack everything that I value, not for those others who are lukewarm friends, I am writing for a man I have never seen.” I built up in my mind the picture of a man who lived in the country where I

had lived, who fished in mountain streams where I had fished; I said to myself, “I do not know whether he is born yet, but born or unborn it is for him I write.” I made this poem about him; it is called “The Fisherman” . . . (*Later Articles* 252)

イェイツは、コネマラ地方ではなく、おそらく幼少期に過ごした北西部スライゴーでの経験にもとづきながらも、田舎で釣りをする、未だ見たこともない、生まれてさえいないかもしれない男を作り出したとする。詩のなかで、男は存在せず夢に過ぎないとも記されている (“man who does not exist, / A man who is but a dream”)。釣り人は、亡霊的で、輪郭が曖昧としており、アングロ・アイリッシュ特有の孤独なカントリー・ライフを送っていると同時に、アイルランド西部に居住し、この詩で形容されている性質を持っている男性なら誰でも当てはまることになる。

亡霊という語は、主に “specter” の訳語として近年流布しており、幽霊を示す他の語、例えば “ghost” や “phantom” などに比べ “specter” や “spectrality” が学術領域で急速に用いられるようになったのは、「亡霊的転回」 (“spectral turn”) の端緒となったデリダの著書『マルクスの亡霊たち』 (1993 年原著、1994 年英語訳) 以降とされる (Blanco and Peeren 2)。過去に死んだにもかかわらず現在に蘇る亡霊の時間錯誤、現れ出るにもかかわらず不在でもあるという撞着的な状態 (Blanco and Peeren 10; デリダ 29) を指す語として、「亡霊」はさまざまな批評に応用され続けている。亡霊が生きているか死んでいるか、何者であるかというのは不確定で決定できず (Blanco and Peeren 9; デリダ 42)、釣り人がイェイツ、シング、小作農のどれでもあり (認識可能な単一のものとして名指せず)、過去の経験にもとづきながら未だ生まれていないというその時間錯誤は、まさに亡霊の特徴と言えるのである。

“The Fisherman” の釣り人は、存在せず夢でしかない (“man who does not exist, / A man who is but a dream)、語り手による想像力によって作り出された (“Imagining a man”) とされ、これは死者の蘇りというより、想像力や夢との関連が深い “phantasm” (幻影／亡霊) と見なしたほうが適切ではあるだろう。この語源になったギリシャ語の “phantasma” (φάντασμα) は、想像力や像とよく訳される一方で、幽霊という意味も合わせ持っており、語の両義性の元になっている (“phantasma”)。とはいえ、亡霊研究で使われる概念的な性質の強い “spectrality” は、“specter”、“ghost”、“phantom”、“phantasm” の総称としてあり、単語間の微妙な違いを細かく差異化することはさして重要ではないだろう。

現在の大多数の聴衆に満足できず、イェイツが作り出した亡霊的・幻影的な聴衆、過去において希望の対象だったが現在では失われている聴衆 (“I’d looked in the face / What I had hoped it would be”) は、ポストコロニアルのある段階で登場すると言えるかもしれない。Kiberd は、ポストコロニアルにおける国民文学の形成に、解釈の共同体を作ることが欠かせなかったと指摘している。そして、同様のポストコロニアルの事例として、Toni Morrison や Alice Walker というアメリカの黒人作家を挙げ、第 1 の段階では自分が読みたい作品を書く (自分がモデルになる)、次の段階でそのモデルを創造するアーティストになるという彼女らの発言を引用する (Kiberd 118-19)。まずは自分がモデル兼最初の読者となり、次第に新しいモデルの提示へ移行していくというのである。聴衆をめぐるポストコロニアル作家の苦境は、自分の作品を

批評し理解する共同体が欠如しているため、まずは自分に向けて書かなければならないことだろう。イエイツの場合は、彼自身の要素を持ち合わせたアイルランド人の原型であり読者である幻影を作り出し、その聴衆が、やがて来たるアイルランドの“my own race”のさきがけになるということである。そして、この未来の読者であり民族は、亡霊論を援用するなら、決して完成することなく、永遠にやって来ない（常に未来にあり続ける）とも言える存在なのである。

ポストコロニアル文学・文化の聴衆についての研究は、ほとんど進んでいないのが実情である。この分野において、1990年代初めから聴衆に関する研究がないことが気づかれていたにもかかわらず、ポストコロニアルの聴衆は周縁的な存在であり続けている（Benwell et al. 6-7）。特に20世紀前半のアイルランドの作家と読者の関係をポストコロニアルの視点で読み解く研究はほとんど存在していないと言っている。

イエイツの聴衆を考えるうえで、まずは詩と演劇の聴衆を区別する必要がある、さらに詩の読者もいくつかの層に分かれる。“The Fisherman”のなかで語り手が敵対していたのは、主に演劇の聴衆であり、彼らの大部分は都市部のカトリック中産階級で構成されていた。一方の詩に関して言えば、イエイツは同時代の英語圏において著名な詩人と認知されていたにもかかわらず、彼の詩は、アイルランドの新聞に掲載される機会を除いて、地元ではほぼ読まれていなかったと考えられる。Gouldは、ロンドンとニューヨークの両方で出版業を営む大手のマクミラン社とイエイツが契約し、大西洋の両岸で著者の意図が反映されたテキストが安定して出版され読者の手元に届くようになったのは1916年のことであるとする（Gould 207）。それまでイエイツの著作はロンドンで不安定な立場にあるばかりか、出版された全集もかなりの部数が売れ残っており、従ってアイルランドでも彼の詩が全く読まれていなかった（Gould 204）。1900年には、マクミラン社内ではイエイツとの契約の話も持ち上がったが、彼のリパブリカン（独立派）寄りの発言のため、リーダー（出版社と契約して作家の原稿を読み、出版可能性について助言を行う職）たちから否定的なコメントを受け、契約の話が流れたことも指摘されている（Gould 193）。イギリス政府による年金（Civil List pension）を除外すればイエイツの年収は、1909年で180ポンド、2017年時点の換算で210万円程度であり（Foster 1: 424）¹、人気作家とはとても言えないだろう。このように、20世紀前半のアイルランドのポストコロニアル詩人は、地元の読者層は当てにできず、大手出版社との契約に漕ぎつけるまでは不安定な契約状況に置かれ、たとえその難しい政治的立場を乗り越え契約できたにせよ、アメリカ分を除いた年間の印税は、全集や他の書籍の出版が重なったときに多くて350万円程度（少ないときは60万円弱）であった（Foster 2: 460）。

イエイツの詩の聴衆は、頼りにできない都市部中産階級以外にも、ハンドプレスや豪華版の書籍を買えるような比較的富裕な層もあったと考えられる。イエイツは、先に引用したBBCの放送において、評価する全てのものを攻撃してくる人々に加え、“lukewarm friends”（Yeats, *Later Articles* 252）も自分の理想とする聴衆にはしないとしていた。おそらくこの「冷めた友人たち」が、イエイツと個人的な親交があり、彼の高額な詩集を購入し自宅の書棚に収蔵はするが、アイルランドの自治に関心がなく政治参加もしない「冷めた」裕福な層と推察される。イエイツの妹リリーとエリザベスが経営していた出版社クアラ・プレスは、彼の比較的高価な版をアイルランドで販売し

てはいたが、手作業による少数しか発行していなかったためイェイツへの実入りはほとんどなく、クアラは恒常的に赤字経営であった（Murphy 192, 234 ; Foster 1: 424, 601n119）。「冷めた」層は、数においても独立のための熱意においてもあまりに貧弱であり、彼の理想の聞き手には入ることがなかった。

もう1つの読者層が、“The Fisherman”を最初に掲載したモダニズム文学雑誌やマクミラン社の書籍を購入する国外の聴衆である。詩誌 *Poetry* は、編集者で詩人の Harriet Monroe が初期購読者 100 名から毎年 50 ドルずつ 5 年間の出資を募り、シカゴの文化的資源になることを目的として創刊され（Scholes and Wulfman 7）、詩がシカゴ市民に読まれる主要なジャンルに成長するのを後押しした（Scholes and Wulfman 123）。海外特派員としてさまざまな雑誌に関わっていた Ezra Pound を介して、イェイツの詩はシカゴで発刊された *Poetry* や *The Little Review*、*The Dial* に次々に掲載され、ロンドンとニューヨークで出版されるマクミランの書籍とともに、これらを読むモダニズム文学の読者は、イェイツのアイルランド外における文学的名声を高める主な勢力であっただろう。彼の詩の題材は極めてローカルでありながらも、スタイルや表現法は地域を超えて受容されることになるが、こうした海外の読者層は彼が意図するアイルランドの読者とは依然として異なるグループであったのである。

以上の2層——比較的裕福な国内にいる少数の読者とモダニズム文学を受容する国外の読者——がイェイツの詩の聴衆となっていた一方で、この読者たちは、アイルランドの文化とアートを自負する国民の統合および独立というイェイツの夢にはほとんど無関係であったと見ていいだろう。こうした袋小路のなかで、イェイツは亡霊的な、現在とはかけ離れた未来にいる読者に向けて書くことになったのである。ポストコロニアルの詩における読者像は、作家の共同体のイメージと密接に重なるとは言えるものの、書籍の販路、作家の経済的自立といった数々のハードルのため、理想化される地元の読者＝共同体と詩人は隔たりを余儀なくされる。そして、統合の夢が実現しないことによる失意、現地の読者との乖離は、英語圏カリブ海の詩人デレク・ウォルコットにも同様に見られる問題となる。

3. ウォルコットと “For my own race”：西インド連邦の瓦解、広範な共同体像、モダニズム詩の読者

ウォルコットとアイルランド文学の関係は深く、これまでも特にシングとジョイスからの強い影響が指摘されてきた（Malouf 146-48; Baugh and Nepaulsingh 198-99）。同じポストコロニアルの島嶼部として、アイルランドとその文学は、抑圧され収奪された状態から脱し、反抗的であると同時に創造的でもありうることをウォルコットに気づかせる先駆的なモデルとなった²。彼の出生地であるイギリス領西インド諸島のセントルシアは、1960 年時点の調査で人口の9割以上がカトリックであり（United Nations Statics Division 63）、メソジストの家庭に生まれたウォルコットはアングロ・アイリッシュのイェイツと同じくマイノリティーとして過ごした。また、ウォルコットは、公務員の父と教員の母の家庭に生まれ（ただし父親はウォルコットが1歳のときに死去）、“brown bourgeois”と呼ばれる最も高い階層の中産階級エリートに属していた点も（Breslin 13）、イェイツと類似する。唯一中等教育を実施していたカトリック系学校に通い（“History of St. Mary’s College”）、クリスチャン・ブラ

ザーズと姉妹関係にあるプレゼンテーション・ブラザーズのアイルランド人教師を通じて、ウォルコットがアイルランド文学に親しんでいた事実は興味深い (Baugh and Nepaulsingh 301-02)。しかしながら、このセクションでは、ウォルコットとイエイツの影響関係というより、ウォルコットが“The Fisherman”と同様、統合の理想を抱きながらもそれが絶たれたあとに、どのような別の理想に憑依されていたのかを考察する。

イギリス領カリブ海の高等教育を一手に担うべく、1948年に最初のキャンパスがジャマイカに設立された西インド諸島大学 (The University of the West Indies) は、英語圏の島々の文化的・教育的統一の象徴的役割を担っており、1950年にリベラル・アーツのクラスの第1期生として入学したウォルコットは、まさに来たるべき西インド連邦の理想を体現する存在だった (Breslin 20-21)。短期間で崩壊した西インド連邦 (The West Indies Federation, 1958-62) は、島々が連合することで政治的独立を勝ち取りたい西インド諸島の側と、小規模で分断された島々をつなげ経済活動を発展させたいイギリス側の思惑が一致する形で成立したが (Williams 508; Peters 9)、カリブ海の諸地域が1つに統合され独立するという長年の夢の実現でもあり、連邦が形成された1958年と翌年のキューバ革命は、激動するカリブ海情勢を象徴する出来事だった。ウォルコットによる1958年の戯曲 *Drums and Colours* は、第1回西インド連邦会議のために依頼をうけて制作され、会議が行われたトリニダード・トバゴの首都ポート・オブ・スペインで上演されるほど、ウォルコットにとっても待望する時代の到来だった。

西インド連邦の統合の精神をよく反映しているのが、Patrick Castagne 作詞・作曲の“A Song for Federation”であろう。

Forged by the love of unity
In the fires of hope and prayer
With boundless faith in our liberty
West Indians all declare
Side by side we stand
With our hearts joined across the sea
This our native land
We pledge ourselves for thee
Here every creed and race find [sic] an equal place
And may God bless our nation
(qtd. in Ghany 49; 原文は全て大文字、一部の改行と下線部は執筆者による)

もともとは西インド連邦のために作られたが、1962年の連邦の瓦解を経て、独立したトリニダード・トバゴの国歌として新たに採用されたこの歌は、その際に“West Indians all declare”が“We solemnly declare”へ、“With our hearts joined across the sea”が“Islands of the blue Caribbean sea”へと改変された (Ghany 49-51; “National Anthem”)。この改変部分は統合の崩壊を端的に伝える一方で、連邦の自由、平等、連合の精神が、トリニダード島とトバゴ島の2つの島から成り、イン

ド系やムスリムも多く住む多民族国家トリニダード・トバゴを一体にする歌 (“Here every creed and race / Find an equal place”) へとスライドしていったことをよく示している。

1970年代に出版を企図されながら未発表のままに終わった（一部は個別に発表された）ウォルコットのエッセイ集 *American, without America* には、連邦が成立した1958年当時のウォルコットが、イェイツの “The Fisherman” の一節 “To write for my own race” と共振しながら、カリブ海の民衆を描く言葉を模索していたことが克明に記されている。

During his time in the United States in 1958, in fact, Walcott had come to realise that ‘the plays [he] had written, and the ones [he] knew [he had to] continue to write were about the poor and the black who spoke an incomprehensible dialect, and [he] could not see them being performed, even on the off-Broadway stage’: Walcott’s primary ambition was to write ‘for and about the people [he] knew . . . for a new theatre . . . with a new language about people whose ordinary life had never been dramatised’ (AWA). Quoting verbatim from W. B. Yeats’s ‘The Fisherman’, Walcott declares that he could only write, ‘for [his] own race’ (AWA). The word ‘race’ here transcends colour or ethnicity to include all West Indians and, in the same piece, Walcott also asserts his right to ‘absorb any influences that [he] needed’ in his attempt to distil a distinctive West Indian style. (Fumagalli 213; AWA は *American, without America* の略称。ブラケットは原著者による)。

イェイツにとっての “my own race” は、来たるべき（しかし訪れはしない）文化とアートで結束したアイルランド国民であったが、ウォルコットの “own race” とは、Fumagalli の指摘する通り、肌の色や出身民族を超えて西インド諸島を包括する民族であり、まさに西インド連邦の理念に符合するものであった。民衆のための、民衆についての作品を書くために、ウォルコットはトリニダードへ帰り、トリニダード・シアター・ワークショップを立ち上げ、初期の戯曲の数々を発表することになる。

しかし、連邦の2大大国ジャマイカとトリニダード・トバゴの不協和に加え（Williams 475）、“a combination of centuries-old inter-island jealousies, inept Federal leadership and the desire of the units to continue pursuing competitive rather than complementary strategies of economic development” (508) のために西インド連邦は頓挫し、ウォルコットに深い失意を残すことになる。1976年に出版された詩集 *The Sea Grapes* に収められた詩 “The Lost Federation” は、連邦の喪失から10年以上が経ったにもかかわらず、語り手は擬人化された船である連邦に対して鬱憤と怒りをぶちまける。

You should crawl into rocks away from
the stare of the fisherman,
you, yes, you!

Don’t you remember the hustings by the beach
with their sulphurous lanterns,

and your lies in the throat of the sea?
You should get your arse baked till your back
is an old map of blisters . . . (Walcott, *The Poetry* 200)

蟹のように漁師の目から逃れひっそりと暮らすよう求められる“you”は、過去に演説した連邦の理想が嘘だったと罵られ、背中にできる水ぶくれが、かつてと同じく分裂したカリブ海の島々を痛々しく描くまで、日差しに身を晒し続けるよう要求される。語り手の過度な憤りは戯画化されもしており、彼は罵倒を繰り返しても怒りが収まらず、“turn your head, man, I’m speaking / now, I haven’t spoken enough, I am speaking”と過剰に迫る。

しかし、語り手は約束を反故にした連邦の“you”と再び連れ立って行くことにし、以前に持っていた民衆のための文学という考えに変更が加えられたことを打ち明ける。

. . . Listen, you

could still come with me again,
to watch the rain coming from far
like rain, not like votes,

like the ocean, like the wind,
nor like an overwhelming majority,
you, who served the people a dung cake of maggots . . . (200-1)

ここでは連邦が選挙において民衆の多数派により否決されたことが暗示され³、西インド諸島の民衆のために文学を書くというウォルコットのかつての面影は薄れている。その民衆はもはや彼の理想的聴衆ではなく、打ち捨てられた船、連邦という幻想（を共有する人々）が聞き手として取って代わったと言えなくもない。都市部の大多数の聴衆から離れ、どこにも存在しない孤独な聴衆を作り出したイエイツと類似する形で、ウォルコットも統合を否定する民衆から距離を置き、より個人的な理想や立場を追い求めることになる。

続く詩集 *The Star-Apple Kingdom* (1979) 所収の詩“The Sea is History”において、ウォルコットは観光ガイドの声を借りてカリブ海の外の人々に向けてその歴史を解説するが(“Sirs, / ... / The sea is History” [253])、ここにも連邦崩壊の出来事が再び挿入される。長い植民地の記憶を詩的に再構成した後、詩の終盤にかけて西インド連邦の失敗が示唆される。

. . . each rock broke into its own nation;

then came the synod of flies,
then came the secretarial heron,

then came the bullfrog bellowing for a vote (255)

個々の島々へと分裂し各々が勝手にわめく様相が、カリブ海の動物たちに皮肉を込めて寓意化されている。最後には、海の歴史とは異なる、連邦なき独立後の陸の歴史がまさに始まろうとしている (“there was the sound / like a rumor without any echo // of History, really beginning.” [256]) とされるのだが、それは始まりを告げる高らかな宣言などではなく空白のままであり、タイトルの “The Sea is History”、つまり層状の堆積が難しい（ゆえに時間性に囚われず過去と現在が混ざりあう）歴史こそがカリブ海地域であるという両義性は残される。

かねてよりカリブ海地域を行き来していたウォルコットは、1981年にボストン大学で職を得た時期に出版した詩集 *The Fortunate Traveller* (1982) で旅の範囲を拡大し、生活の拠点の1つになる北米と時おり訪れるヨーロッパについての詩を増やす。ここで強調されるのは、ヨーロッパという旧世界との対比として、地域的・文化的な複雑さを帯びる新世界アメリカの姿である。

詩 “North and South” において、ヨーロッパは、声に詰まる老いた女性のように落ち葉で詰まった雨樋で表され、その老女はアフリカの植民地に勤務する息子たちから手紙を受けとっていたとされる (“I think of Europe as a gutter of autumn leaves / choked like the thoughts in an old woman’s throat. / But she was home to some consul in snow-white ducks / doing out his service in the African provinces” [289])。一方で、イギリス女王の名を留めたヴァージニア州を徘徊する黒人と思わしき語り手は、奴隷として失われた多くの犠牲者をホロコーストに例え、立ち昇る煙に絶滅収容所のそれを重ね、南部白人の視線やクー・クラックス・クランの幽霊に怯える。3カ国語を解するカリブ海の知識人らしく、語り手は “singé” という英語からフランス語で「自分は猿だ」 (“*Je suis un singe*”) と連想する自意識、その反面でアメリカ音楽を歴史的に担ってきたのは自分たちだという自負を見せる (“I am one of that tribe of frenetic or melancholy / primates who made your music for many more moons” [291])。アメリカ南部のさらに南から来たカリブ海出身者の視点をもって、ヨーロッパの植民と奴隷貿易、人の移動、音楽が刻まれた歴史の古層を掘り起こし合衆国を再構成しようとするウォルコットは、これまでカリブ海に留まっていた彼の共同体像を一段と押し広げるようになる。

詩 “Map of the New World” では、再び西インド連邦の夢が繰り返されるが、それは汎アメリカ主義 (Pan-Americanism) 的な「新世界」の名のもとに内省される⁴。

I ARCHIPELAGOES

At the end of this sentence, rain will begin.

At the rain’s edge, a sail.

Slowly the sail will lose sight of islands;

Into a mist will go the belief in harbors

of an entire race. (Walcott, *The Poetry* 292)

またしてもカリブ海全ての民族を統合するという連邦的なイメージが現れる。しかも、この帆船に乗っているのは語り手であるため、“harbors / of an entire race”を信じ霧のなかに消えていくのは語り手自身ということになる。第2セクションの“THE COVE”では、船上の語り手は“Far from the curse of government by race”にいとされ、島々が独自に敷く単一のナショナリズムを嫌い上陸を迷っているかのようにさえ書かれている。

しかし、これまで取り上げてきた詩との明らかな違いは、「新世界」という観点から眺められたカリブ海が、トロイ戦争に擬せられた互いの闘争を終え、相互に連携する光で照らされることであらう。

The flame has left the charred wick of the cypress;
The light will catch these islands in their turn. (Walcott, *The Poetry* 293)

西インド連邦に代わる共同体として、英語圏カリブ海地域ではカリブ自由貿易連合 (Caribbean Free Trade Association) が1965年に、カリブ共同体 (Caribbean Community, CARICOM; 以下カリコム) が1973年に結成されたが、これらはいくまで自由貿易の促進を目的とした組織であり、カリコムが英語圏の外にまで拡大し、「経済」以外にも「人種、階級、抵抗」の概念も含む「汎カリブ的地域主義」(Pan-Caribbean regionalism)を採用し始めるのは冷戦後のことである (Lewis et al. 4-7; Girvan 18)。そしてさらに、1980年代の初めにウォルコットによって新たに夢見られた統合の幻影は、カリブ海の島々を超え、アメリカ全体を包む汎アメリカ的なヴィジョンだった。この汎アメリカ主義は、言うまでもなく、20世紀後半まで続いた合衆国主導による秩序、そのラテンアメリカに対する度重なる軍事的・外交的介入を意味する姿勢とは異なり⁵、カリブ海の側から試みられた人種・文化・歴史の細部にもとづく新しい交流の形である。

とはいえ、イエイツと聴衆の関係と同様に、このようなカリブ海地域を含む広域の共同体のイメージの提示と、ウォルコットがカリブ海で広く読者を得ていたかどうかは、全く別の問題である。例えば、ウォルコットの出生地セントルシアの識字率は1980年の段階で5割であり (Breslin 13)、バルバドスとジャマイカで出版された最初の3詩集は極少数の発行に留まっていたため、英語圏カリブ海地域において、彼の詩が広く読まれていたとは到底言えない。その意味で、ウォルコットのカリブ海の読者は、イエイツの亡霊的な釣り人と同じく、やがて来たるべき未来に属していたわけである。

ポストコロニアルにおける現地読者の不在は、作家が生活のためにカリブ海の外の手出版社と契約することを求め、海外の読者に向けて書くことを余儀なくする。第4詩集の *In a Green Night* がイギリスの手出版社ジョナサン・ケープとの契約により出版されることになるのは、さまざまな文学的影響と自由自在に扱われる詩型の効果を即座に見抜くリーダー William Plomer の絶賛によるところが大きい (Low, “William Plomer” 94-95)。すなわち、ウォルコットの詩の主な読み手はモダニズム文学を受容していたアングロ・アメリカンの読者層なのであり、彼の詩がモダニズム文学の延長として評価されるという素地は、カリブ海の作家たちを評価したロンドンの文学エリートによって形作られていた (Low, *Publishing the Postcolonial*, ch.4)。英語圏カリブ海の作家たちは、

反植民地主義的であったにもかかわらずロンドンで受け入れられたという点でイェイツと異なるとはいえ、ウォルコットと海外読者との関係は、イェイツとマクミラン、モダニズム雑誌の読者との関係に非常に近いだろう。ウォルコットはイギリスとアメリカで文学的名声を高めたものの、カリブ海に彼の読者はほとんど存在しなかったのである。

4. 結

イェイツの詩 “The Fisherman” は、彼の演劇の聴衆であった都市部のカトリック中産階級からの離反より生まれ、この世には存在しない釣り人を構想するものだった。この釣り人は、イェイツを含むアングロ・アイリッシュの作家や政治家、アイルランド西部の小作農などと読み込まれてきたが、この読みのどれもが妥当なのは、この釣り人が複数の属性を同時に抱え、何か1つに限定することができない決定不可能な幻影／亡霊として作られていたからだだった。一方で、イェイツの詩は、彼の周りの政治的に熱意の足りない読者層を除き、アイルランド内でほとんど読まれることがなく、マクミラン社やアメリカのモダニズム雑誌の読者たちは、イェイツが理想とする、アイルランドを統合しその独自の価値に気づく聴衆とは程遠いものだった。現実のイェイツは、アイルランド内に生活を維持できるほどの読者を持たず、英語圏に広範な販路を持つ大手出版社との契約を経て、何とか作家業を維持できるほどだった。

ウォルコットは、セントルシアの中産階級エリートとして生まれ、英語圏カリブ海地域の高等教育を担う西インド諸島大学でリベラル・アーツの教育を受けた第1世代であり、旧イギリス領の島々を統合する長年の夢の実現であった西インド連邦の申し子だった。ウォルコットとイェイツが類似したポストコロニアルの段階に属していると言えるのは、ウォルコットが10代から脱植民地化のモデルとしてアイルランド文学に親しんでいたからだけでなく、“The Fisherman”の一節 “To write for my own race”にある民族の統合の理想と、その民衆のために作品を書くという情熱が、2人のなかでともに挫折したことによる。ウォルコットの場合は、亡霊的な読者を作り出すとは言わないまでも、黒人、白人、混血のどの人種も寄港できる港としての楽園的な西インド連邦像が、幻影として彼の詩に何度もたち現れることになった。やがてその幻影は、カリブ海の視点にもとづきながらも、汎アメリカ的なヴィジョンへと結実していく。

しかしながら、ポストコロニアルの詩において示される読者像は、作家が理想とする共同体の及ぶ範囲を映し出しているといえるものの、イェイツとウォルコットにおいては、地元の読者層が薄く、モダニズム詩の海外読者が主要な聞き手であり、ロンドンの大手出版社と契約せざるをえないといった問題によって、現地の読者と埋めがたい隔たりが生じてしまっていた。詩の中に出てくるネイティブの聴衆は、少なくとも作品が書かれた同時代の空間にはほとんど存在していなかったのである。

勤務していたボストン大学とハーバード大学でウォルコットが起こした1980年代の2件のセクシャル・ハラスメントは、彼のオックスフォード大学詩学教授選からの辞退につながり、2017年の死去に際しては、彼の評価を二分させることになった⁶。今後、ウォルコットと彼の作品は、その男性中心的な性差別の側面からも厳しく問われることになるだろうが、少なくとも、イェイツとウォルコットが抱いた理想的な幻影は、植民地を脱しようとする地域の詩人たちがたどり着く1つ

の到達点ではあったのである。

本稿は、第59回日本イエイツ協会大会シンポジウム（2023年11月12日 於立教大学）「W・B・イエイツの亡霊：イエイツ作品の共時的・通時的な文脈と影響について」（司会・講師 坂内太、岡室美奈子、小林広直、諏訪友亮）における口頭発表に加筆・修正をしたものである。

注

1. National Archives の “Currency Converter” により算出された 2017 年の換算額 14,000 ポンドを、2017 年の 1 ポンド = 150 円で計算。
2. ウォルコットがアイルランド文学の影響とそれへの共感を最も雄弁に語っているのは以下の箇所だろう。

I've always felt some kind of intimacy with the Irish poets because one realized that they were also colonials with the same kind of problems that existed in the Caribbean. They were the niggers of Britain. . . . [O]ne could come out of a depressed, deprived, oppressed situation and be defiant and creative at the same time. As a Methodist in a Catholic country, I also sympathized with the most rebellious aspect of Irish literature, priest-hating and such. . . .

And then the whole question of dialect began to interest me. When I read Synge's *Riders to the Sea* I realized what he had attempted to do with the language of the Irish. He had taken a fishing-port kind of language and gotten beauty out of it, a beat, something lyrical. Now that was inspiring, and the obvious model for *the Sea at Dauphin*. (Walcott, “An Interview” 59)

3. 実際、1961 年に行われたジャマイカの国民投票によって加盟の継続が否決され、ジャマイカが西インド連邦から脱退することで西インド連邦は崩壊することになる (Johnson 282)。「選挙」や「多数派」は、一義的にジャマイカの国民投票を指すだろう。
4. ウォルコットとアメリカ全体との関係に関する指摘は Malouf を参照 (151)。Malouf は主に “Transamerican” という語を用いている。
5. 旧来の汎アメリカ主義については Scarfi and Sheini (1-4) に詳しい。2 人は近年のアメリカ大陸全体における知的・文化的協力、建築やスポーツ、フェミニズムやジェンダーの権利における相互作用を伴う新しい汎アメリカ主義に注目している。
6. ニューヨーク・タイムズに掲載されたウォルコットの訃報が、セクハラを十分な証拠にもとづかない “allegation” と表現したとして反論する投書を行った Cohen は、ハーバード大学がセクハラを受けたうえ成績も意図的に C へ落とされたという学生の訴えを認め、セクハラに対する初の公式方針を採用するに至ったとしている (Cohen)。また、Spaeth は近年のアーティストを取り巻く性的スキャンダルを引きつつ、ウォルコットが声を奪われた人々に声を与え、彼の政治性は Jean Rhys についての詩に見られるように “intersectional” であったことを認めながらも、アートと人生は切り離せず、“art—that space where our mortal condition approaches the

immortal, where our myriad flaws form a fertile ground for empathy—cannot redeem Walcott for his behavior” と結論づけている (Spaeth)。

引用文献

- Albright, Daniel. “Notes.” *The Poems*, by William Butler Yeats, Everyman’s Library, 1992.
- Baugh, Edward, and Colbert Nepaulsingh. “Annotations.” *Another Life: Fully Annotated*, Lynne Rienner Publishers, 2004, pp. 219–336.
- . “Reading Another Life: A Critical Essay.” *Another Life: Fully Annotated*, Lynne Rienner Publishers, 2004, pp. 153–217.
- Benwell, Bethan, et al. “Introduction.” *Postcolonial Audiences: Readers, Viewers and Reception*, edited by Bethan Benwell et al., Routledge, 2012, pp. 1–23.
- Blanco, Maria del Pilar, and Esther Peeren. “Introduction.” *The Spectralities Reader*, Bloomsbury, 2013, pp. 1–27.
- Breslin, Paul. *Nobody’s Nation: Reading Derek Walcott*. U of Chicago P, 2001.
- Cohen, Adam. “Derek Walcott’s Acts of Sexual Harassment.” *The New York Times*, 21 Mar. 2017, <https://www.nytimes.com/2017/03/21/opinion/derek-walcotts-acts-of-sexual-harassment.html>.
- Fleming, Deborah. “*A Man Who Does Not Exist*: The Irish Peasant in the Work of W.B. Yeats and J.M. Synge.” U of Michigan P, 1995.
- Foster, R. F. *W.B. Yeats: A Life: The Arch-Poet 1915–1939*, vol. 2, Oxford UP, 2003.
- Fumagalli, Maria Cristina. *Derek Walcott’s Painters: A Life with Pictures*. Edinburgh UP, 2023.
- Ghany, Hamid. “Understanding Our National Anthem.” *Trinidad and Tobago: 50 Years of Independence*, First Strategic Insight, 2012, pp. 49–51, <https://firstforum.org/publishing/specialistpublishing/trinidad-and-tobago-50th-anniversary/>.
- Girvan, Norman. “Constructing the Greater Caribbean,” *Pan-Caribbean Integration: Beyond CARICOM*, edited by Patsy Lewis, et al., Routledge, 2017, pp. 16–27.
- Gould, Warwick. “W. B. Yeats on the Road to St Martin’s Street, 1900–17.” *Macmillan: A Publishing Tradition*, edited by Elizabeth James, Palgrave Macmillan UK, 2002, pp. 192–217.
- Heaney, Seamus. *Preoccupations: Selected Prose, 1968–1978*. Faber and Faber, 1980.
- Hirsch, Edward. “The Imaginary Irish Peasant.” *PMLA*, vol. 106, no. 5, 1991, pp. 1116–33. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/462684>.
- “History of St. Mary’s College.” *St. Mary’s College, St. Lucia*, 21 Feb. 2019, https://smc.edu.lc/?page_id=183.
- Johnson, Michael A. “The West Indies Federation.” *The Jamaica Reader: History, Culture, Politics*, edited by Diana Paton and Matthew J. Smith, Duke UP, 2021, pp. 279–82.
- Kiberd, Declan. “Yeats and Criticism.” *The Cambridge Companion to W. B. Yeats*, edited by Marjorie Howes and John Kelly, Cambridge UP, 2006, pp. 115–28.
- Lewis, Patsy, et al. “Pan-Caribbeanism and the CARICOM Widening Project,” *Pan-Caribbean*

- Integration: Beyond CARICOM*, edited by Patsy Lewis, et al., Routledge, 2017, pp. 1–14.
- Low, Gail. “Local and Metropolitan Publishing.” *The Routledge Companion to Anglophone Caribbean Literature*, edited by Michael A. Bucknor and Alison Donnell, Routledge, 2013, pp. 616–25.
- . *Publishing the Postcolonial: Anglophone West African and Caribbean Writing in the UK 1948–1968*. E-Book ed., Routledge, 2012.
- . “William Plomer Reading: The Publisher’s Reader at Jonathan Cape.” *Postcolonial Audiences: Readers, Viewers and Reception*, edited by Bethan Benwell et al., Routledge, 2012, pp. 86–98.
- Malouf, Michael. “Dissimilation and Federation: Irish and Caribbean Modernisms in Derek Walcott’s *The Sea at Dauphin*.” *Comparative American Studies: An International Journal*, vol. 8, no. 2, June 2010, pp. 140–54.
- McDiarmid, Lucy. *The Irish Art of Controversy*. Cornell UP, 2005.
- Murphy, William M. *Family Secrets: William Butler Yeats and His Relatives*. Syracuse UP, 1995.
- “National Anthem.” *Ministry of Foreign and CARICOM Affairs*,
<https://foreign.gov.tt/about/trinidad-tobago/national-symbols/national-anthem/>.
- National Archives. “The National Archives - Currency Converter: 1270–2017.” *The National Archives*,
www.nationalarchives.gov.uk/currency-converter/.
- Peters, Dexnell. “The Masses Speak: Popular Perspectives on the West Indian Federation.” *Ideology, Regionalism, and Society in Caribbean History*, edited by Shane J. Pantin and Jerome Teelucksingh, Springer International Publishing, 2017, pp. 9–40.
- “Phantasma” *Etymonline*, 12 May 2020, <https://www.etymonline.com/word/phantasma>.
- Scarfi, Juan Pablo, and David M. K. Sheinin. “Introduction: The Pan-American Shift from Apology for Empire to Imperial Critique to Latin American Agency,” *The New Pan-Americanism and the Structuring of Inter-American Relations*, edited by Juan Pablo Scarfi and David M. K. Sheinin, Routledge, 2022.
- Scholes, Robert, and Clifford Wulfman. *Modernism in the Magazines: An Introduction*. Yale UP, 2010.
- Spaeth, Ryu. “Derek Walcott’s Dueling Legacies,” *The New Republic*, 22 Mar. 2017,
<https://newrepublic.com/article/141492/derek-walcotts-dueling-legacies>
- Torchiana, Donald, T. *W.B. Yeats and Georgian Ireland*. 1966. Catholic U of American P, 1992.
- United Nations Statistics Division, “2010 Population and Housing Census.”
https://unstats.un.org/unsd/demographicsocial/census/documents/Saint_Lucia/SL_PreCensusRepApr11.pdf.
- Unterecker, John Eugene. *A Reader’s Guide to William Butler Yeats*. Noonday, 1959.
- Walcott, Derek. “An Interview with Derek Walcott.” *Conversations with Derek Walcott*, edited by William Baer, UP of Mississippi, 1996, pp. 50–63.
- . *The Poetry of Derek Walcott 1948–2013*. Edited by Glyn Maxwell, Farrar, Straus and Giroux, 2014.
- Williams, Eric. *From Columbus to Castro: The History of the Caribbean*. Vintage Books, 1984.
- Yeats, William Butler. “The Fisherman.” *Poetry*, vol. 7, no. 5, Feb. 1916, pp. 219–21.

諏訪： “To Write for My Own Race”： イェイツとウォルコットに見るポストコロニアルの幻影

---. *Early Essays*. Edited by Richard J. Finnegan and George Bornstein, Scribner, 2007.

---. *Later Articles and Reviews: Uncollected Articles, Reviews, and Radio Broadcasts Written After 1900*. Edited by Colton Johnson, Scribner, 2000.

---. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*. Edited by Peter Allt and Russell K. Alspach, Macmillan, 1957.

デリダ、ジャック 『マルクスの亡霊たち——負債状況 = 国家、喪の作業、新しいインターナショナル』
増田和夫訳、藤原書房、2007。